

九州文化財研究所創設15周年記念

はじめる

加藤清正の端城

と文化遺産の活用

—熊本城築城400年によせて—

開催日：平成20年8月9日（土）

場所：くまもと県民交流館 パレア

基調講演：「史跡と歴史とまちおこし」

九州大学大学院教授 服部 英雄 氏(元文化庁記念物課)

シンポジウム：「城跡・歴史遺産を活用した地域おこしの事例と取り組み」

コーディネーター：元国立八代工業高等専門学校教授 佐藤伸二 氏

参加：鷹ノ原城(南関町) 宇土城(宇土市) 佐敷城(芦北町) 水俣城(水俣市)
各地域の担当者と地域おこしグループ

後援：熊本文化財保護協会・「熊本城400年と熊本ルネッサンス」県民運動本部・
熊本史学会・肥後考古学会・熊本歴史学研究会・熊本地名研究会

シンポジウム開催にあたって

私たちが暮らす熊本には、人々の生活にとけこんだ数多くの文化遺産が存在します。それらは、それぞれの地域の歴史を語り、人々の心を支えるとともに、個性ある地域づくりを進めるうえで、欠かせない素材です。その中には、史跡指定により重要文化財として位置付けられたことで、地域の活性化に貢献し、教育・産業育成・観光に少なからず影響を与えている例もあります。

現在、地域の再編が進む中、このような多様な価値を持つ文化遺産を、改めて認識する意義は大きく、その可能性を引き出すための機会が必要ではないでしょうか。

このような趣旨のもと、九州文化財研究所は「加藤清正の端城と文化遺産の活用 ―熊本城築城400年によせて―」をテーマにシンポジウムを開催します。築城400年を迎えた熊本城に関する加藤清正の端城（支城）に注目し、それをとりまく地域の文化遺産を来場された多くの方に考えていただく機会を持ちたいと思います。

今回のシンポジウムでは、地域の文化遺産に精通された、九州大学大学院教授 服部英雄先生に基調講演をしていただきます。先生は文化庁に勤務されたご経験などから、熊本県内の文化遺産についても深い見識をおもちです。引き続き、加藤清正の端城（支城）を再認識し、文化財担当者及び地域の活動グループの方々から文化遺産に対する取り組みや考え方、活動事例を紹介いたします。これを機会に、皆様の身近に息づく郷土の文化遺産を、掘り起こしてはいかがでしょうか。

最後になりましたが、基調講演を快くお引き受けいただきました服部英雄先生、今回のシンポジウムに御理解と御協力をいただきました、パネリストをはじめとした多くの方々に、厚く御礼申し上げます。

平成20年8月9日

九州文化財研究所
徳永 和人

×九州文化財研究所創設15周年記念 ―熊本城築城400年によせて―

加藤清正の端城と文化遺産の活用

主催：×九州文化財研究所

後援：熊本県文化財保護協会

「熊本城400年と熊本ルネッサンス」県民運動本部

熊本史学会

肥後考古学会

熊本歴史学研究会

熊本地名研究会

来賓紹介（順不同）

村上寅美氏（熊本県議会議員）

吉丸良治氏（「熊本城400年と熊本ルネッサンス」県民運動本部・永青文庫常務理事）

村井眞輝氏（熊本県文化財保護協会事務局長）

松本寿三郎氏（熊本史学会会長・元熊本大学文学部教授）

隈昭志氏（肥後考古学会会長）

松野國策氏（熊本歴史学研究会会長）

白木原和美氏（熊本大学文学部名誉教授）

工藤敬一氏（熊本大学文学部名誉教授）

西健一郎氏（元九州大学埋蔵文化財調査室）

吉村豊雄氏（熊本大学文学部教授）

今村克彦氏（熊本県文化財保護審議会委員）

鈴木喬氏（元熊本市文化課課長）

島津義昭氏（九州考古学会会長）

池上正示氏（本妙寺副住職）

九州文化財研究所創設15周年記念 —熊本城築城400年によせて—

加藤清正の端城と文化遺産の活用

日 程 表

平成20年8月9日(土)

基調講演・シンポジウム

会 場 : くまもと県民交流館パレア パレアホール

12時00分 受付開始

基調講演

13時00分 開会

13時15分 基調講演

「史跡と歴史とまちおこし」

服部 英雄氏(九州大学大学院教授)

シンポジウム

14時25分 開会

「城跡・歴史遺産を活用した地域おこしの事例と取り組み」

コーディネーター: 佐藤 伸二氏(元国立八代工業高等専門学校教授)

パネリスト: 服部 英雄氏

南関町 坂本 重義氏(南関町教育委員会)

野口 第三郎氏(南関宿場町伝楽人)

宇土市 藤本 貴仁氏(宇土市教育委員会)

田尻 正三氏(宇土大太鼓フェスティバル実行委員)

芦北町 深川 裕二氏(水俣葦北地名研究会)

吉本 憲夫氏(街道を歩こう会 歩き人)

水俣市 正岡 祐子氏(水俣市教育委員会)

福田 興次氏(株式会社福田農場ワイナリー代表取締役)

16時30分 閉会

懇親会

会 場 : KKR ホテル熊本

17時30分 開会

19時30分 閉会

目 次

「端城」とは	5
--------	---

第一部 基調講演

史跡と歴史とまちおこし	8
-------------	---

第二部 シンポジウム資料

坂本重義・野口第三郎「鷹ノ原城跡と文化遺産の活用」	12
藤本貴仁・田尻正三「近世宇土城跡と文化遺産の活用」	19
深川裕二「佐敷城跡と文化遺産の活用」	25
吉本憲夫「江戸時代の肥薩を訪ねてみたい」	30
正岡祐子「水俣城跡と文化遺産の活用」	32
福田興次「水俣市の文化遺産と地域おこし」	36

第三部 加藤清正の端城と地域の文化財

鷹ノ原城（南関城・関ノ城）	38
阿蘇城（内牧城）	40
矢部城（愛藤寺城・相藤寺城・愛東寺城）	42
宇土城—城山—	44
八代城（麦島城・松江城）	46
佐敷城	48
水俣城	50
コラム「熊本の辛子レンコン」	52

「端城」とは

「端城」とは、本城（政治・軍事・経済の中心となる城）を守るために配置され、防衛及び地域における支配拠点の役割をもつ城を指す。広範囲の領土を支配する近世領主にとって、本城以外にも各地域の拠点となる城が必要であった。

近世初頭、「端城」という語は使われていた。例えば、細川家史料「部分御旧記 城郭部」は、「八代之儀ははしろの儀に候らへば、普請などつかまつる事いらざるの由、上様御内意の由にて」とある。これは、八代城普請について、徳川家光が幕府年寄稲葉正勝へ非公式に述べたものの控えである。つまり、江戸時代には「端城」という語が一般に使用されていたのである。

天正15年（1587）の豊臣秀吉の九州仕置後、天草郡・球磨郡を除く肥後国は、佐々成政が領有することになる。しかし、成政は翌年起きた「国衆一揆」の責任を問われ切腹を命じられる。天正16年（1588）、佐々成政の旧領地は加藤清正・小西行長が分割統治することになる。加藤清正は熊本城を本城として、南関・阿蘇・佐敷・水俣を端城とした。小西行長は宇土城を本城とし、矢部・八代を端城とした。

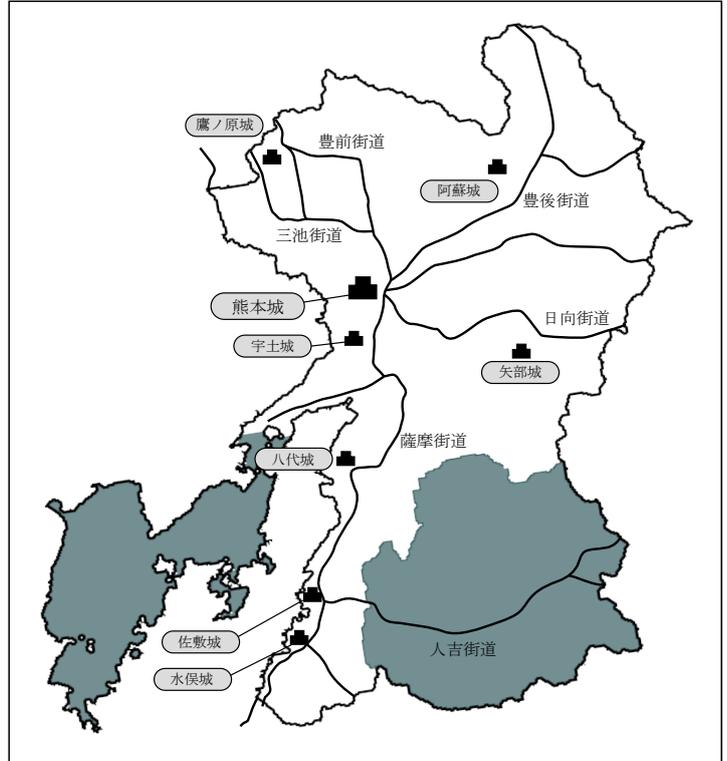
関ヶ原の戦い後、加藤清正は戦功により旧小西領を加えて、天草・球磨郡を除く肥後国を統治することになる。

慶長の「肥後国絵図」によると、当時の加藤領には、関ノ城（鷹ノ原城）・阿蘇城・矢部城・宇土城・八代城・佐敷城・水俣城の七城が確認できる。肥後と筑後の国境に関ノ城、豊後国に備えて阿蘇城、日向国に備えて矢部城、宇土半島の丘陵部に宇土城、相良領との隣接地に八代城・佐敷城、薩摩との国境に水俣城が配置されている。

上記の加藤清正の端城には、次の挙げる性格が顕著に見られる。

- ①堅固な地に築かれている事（軍事）
- ②交通の要衝に築かれている事（経済）
- ③在地支配の拠点を有する（行政）

このように、加藤清正の端城は軍事面における要所、もしくは政治・経済面において重要な地に築かれている。そして、端城が置かれている地は、元和の一国一城令後、八代城を除き、城が破却されても、江戸時代を通じ在町として地域の経済・文化の中心で、街道筋の宿場町などとして発展を続けた。



肥後熊本の端城位置図

肥後熊本の端城年表

区分	時代	出来事	領主	本城	端城
加藤・小西時代	天正 16 年 (1588)	<ul style="list-style-type: none"> 加藤清正、肥後に入国。南関（大津山）城代として加藤清兵衛を置く。 小西行長、肥後に入国。宇土城（旧城）に入る。 この頃、佐敷城築城か？ 加藤重次が城代となる。『肥後国誌』 この頃、八代城（麦島城）築城か？ 	加藤清正	熊本	鷹ノ原（南関）・阿蘇・佐敷・水俣 (4 端城)
	天正 17 年 (1589)	<ul style="list-style-type: none"> 小西行長、宇土城（新城）築造を開始。 			
	文禄元年 (1592)	<ul style="list-style-type: none"> 文禄の役 梅北国兼の乱が起こる。（佐敷城、一時占拠される） 	小西行長	宇土	矢部・八代 (2 端城)
	文禄 2 年 (1593)	<ul style="list-style-type: none"> 加藤清兵衛、唐津に出奔。加藤正次が大津山城代となる。 			
	慶長 2 年 (1597)	<ul style="list-style-type: none"> 慶長の役 			
加藤時代	慶長 5 年 (1600)	<ul style="list-style-type: none"> 関ヶ原の戦い、小西行長刑死。加藤清正、小西領を併せて領する。 加藤清正、宇土城を攻め、落城させる。 清正、大津山城を廃し、新城（鷹ノ原城）を築く（南関紀聞）。 中村将監、水俣城代となる。 	加藤清正	熊本	鷹ノ原（南関）・佐敷・水俣・八代・阿蘇・宇土・矢部 (7 端城)
	慶長 16 年 (1611)	<ul style="list-style-type: none"> 加藤清正、没。 			
	慶長 17 年 (1612)	<ul style="list-style-type: none"> 幕命により、宇土城・水俣城・矢部城が廃城となる。 	加藤忠広		鷹ノ原（南関）・佐敷・八代・阿蘇 (4 端城)
慶長 20 年 (1615)	<ul style="list-style-type: none"> 元和一国一城令により鷹ノ原城・佐敷城・阿蘇城が廃城となる。 	八代 (1 端城)			
細川時代	寛永 9 年 (1632)	<ul style="list-style-type: none"> 加藤忠広改易、細川忠利入国。 	細川忠利		



第 1 部 基調講演

「史跡と歴史とまちおこし」

九州大学大学院教授
服部 英雄 先生

史跡と歴史とまちおこし

九州大学大学院教授 服部 英雄

中世の城の整備

上の国勝山館：一乗谷朝倉館 八王子城 吉川館／満徳院 名護屋城 赤木城
熊本県内の城と史跡整備委員としての関わり：隈部館 柵底城 熊本城 人吉城 宇土城
田中城（和仁城） *富岡城

南関町史（鷹ノ原城と御茶屋）

加藤端城

寺沢・天草の場合の端城（石垣を持つ城：富岡本城、金浜城、久玉城、大浦城）

黒田・六端城（若松城 黒崎城 大隈城 鷹取城 小石原城、以上は豊前境 左右良くまでら>城、
筑後境：臨戦態勢なのか）

城はだれのものか（朝鮮役の場合、預け城、管理は諸藩）

城の戦闘性・軍事性

朝鮮役を経験した大名の城の特色（福岡城や熊本城の共通性、きわめて実戦的）

枳形：ふつうの枳形は一の門、二の門をもつ、しかし二の門（高麗門）を欠く枳形

門：格子扉（門扉の上部が開放的）

原則として突き揚げ戸

西生浦城（倭城） 順天城

臨機応変：時間的に地形の整備が完全にはできなかったものか。完全な防御を望み得ない、
その中でも守る。

本妙寺と金窟（なぜ被虜人が殉死するのか 薩摩も、鍋島も）

文化財を活用した地域おこし

とのさまみち・さがら道

人吉と八代の最短路（相良氏軍事道路あぜちの場合、庵室通）、ふつうは海路を行く佐敷通
戦国時代の遺跡 埋蔵金の伝承のみ 橋かけ谷は通らない（吊り橋は牛馬が渡れないため）

尾根どうしのみち

西南戦争で使われる（サンポウ台場、牆壁、塹壕が多数残る、激戦地）

廃道化 伐開によって通行が可能

講師紹介

服部英雄（はっとり ひでお）

専攻 日本中世史

経歴

昭和24年（1949） 名古屋市に生まれる

昭和51年（1976） 東京大学大学院人文科学研究科

国史学専攻修士課程修了

同年 東京大学文学部助手

昭和53年（1978） 文化庁文化財保護部記念物課・史跡部門、文部技官・文化財調査官

平成6年（1994） 九州大学大学院比較社会文化研究科助教授

平成9年（1997） 九州大学大学院比較社会文化研究科（改組後は研究院）教授



「あぜち道」を歩いた直後の服部英雄先生

主要著書

『景観にさぐる中世—変貌する村の姿と荘園史研究』（新人物往来社 1995）

『地名の歴史学』（角川叢書 2000）

『二千人が七百の村で聞き取った二万の地名・しこ名—佐賀平野の歴史地名地図稿』

（花書院 2001）

『地名のたのしみ—歩き、み、ふれる歴史学』（角川文庫 2003）

『歴史を読み解く—さまざまな史料と視角』（青史出版 2003）

『武士と荘園支配』（山川日本史リブレット24 2004）

『峠の歴史学 古道をたずねて』（朝日選書830 2007）

